

ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル



ヒグマと出会わないために！
引き寄せないために！
出会ってしまったら？

2002. 2 改訂版

斜里町知床自然センター管理事務所
山中 正実

■ 出会わないことが、最善の安全対策！！

さまざまな野外活動においてヒグマにかかわる危険を回避するために最も重要なことは、「出会わないこと」、「引き寄せてしまわないこと」である。一旦遭遇してしまえば、その時々さまざまな状況や突発的な不可抗力によって、予想外のことがおこりうる。絶対確実な対処法はないというが良い。

知床国立公園は世界的にみても最も高密度にクマが生息する地域の一つであるが、そのような環境にあってさえ、注意深くクマを回避する対応をとれば、出会う可能性をほとんどゼロに近いものとするのが可能である。またヒグマを不用意に引き寄せないような配慮を怠らないことで、遭遇の可能をさらに小さなものとするができる。

本マニュアルは、1978年から1987年まで筆者とフィールドワークをともにしてくれた北海道大学ヒグマ研究グループの多数のメンバーと共有した様々なヒグマとの出会いの経験がベースとなっている。さらに年間400～600件ものヒグマの出没に対応して、知床国立公園の公園利用者の安全確保と自然状態のクマの生存を両立させるために、日夜努力を続ける斜里町知床自然センター管理事務所のスタッフたちの経験にも裏打ちされて作成された。数多くのクマとのやりとりに関する貴重な記録を残してくれた多くのスタッフに感謝の意を表したい。

尚、本マニュアルは、まだここに整理されていない状況に関する記述や、今後得られる新たな知見について、更に改良を加えて行く途上にあるものであり、順次改訂される予定である。

人がいることをクマに知らせてやろう！



1) 物音たてろ！、声を出せ！

- * ヒグマの聴覚は、人間よりもはるかにすぐれている。距離的に余裕のあるうちに人の接近に気付けば、クマは人を避けて離れて行く。多くの場合、クマがいたことに人間側は気付きもしないことがほとんどである。ヒグマは基本的に極めて遠慮がちな大型哺乳類なのだ。普通にただ歩いていても、ヒグマは敏感に感じ取って逃げていくことが多い。
- * 従って、人間側が積極的に音をたてて知らせる努力をしてやれば、遭遇の可能性は極めて低いものとなる。その手法は人によってやりやすい方法であれば何でも良く、要は自然界にあまりない異質な物音をたてればよい。例えば、鈴をぶら下げることは最も一般的に行われている。よく見られるザックにシュラカップをぶら下げてカラカラいわせている人は、もうそれで十分である。空き缶に小石を入れ、紐をつけてぶら下げて振れば、最も安上がりかもしれない。
- * 声を出して歩くのも有効である。複数の人で行動している時は、お互いに世間話でもしながら歩けば、ヒグマにとって十分に人の接近の予告になる。ただし、単独ではなかなか話もしづらいし、一人で山の中をブツブツ独り言を言いながら歩いていたら、突然他人に会った場合、変人かと警戒される恐れがある。
- * ヒグマの生息地の山の中では単独行動を避け、複数で歩くことの方が安全である。人数がいれば、足音や声などどうしても物音が出るし、万が一クマと出会っても、複数でまとまって行動しているグループは襲われづらいことが、北米での研究で証明されている。

要点の整理！

ヒグマと出会わないために！

1) 自分の存在をクマに知らせてやる。物音を立てながら行動すること。

- * ヒグマが人の接近に気付くと、ほとんどの場合、クマの方で避けて行く。気付かぬまま至近距離で出会うと、驚いて自己防衛のための攻撃行動に走る危険性がある。クマは人間よりもはるかにすぐれた聴覚や嗅覚を持っている。距離的に余裕のあるうちに、積極的に人の接近を知らせてやる努力を怠らなければ、人が気付く前にクマは出会いを避けてくれるものだ。

2) ヒグマの餌場に近づくな！ 季節によって変わるクマの生き様を学んでおこう。

- * 季節によってヒグマが餌場としてよく利用している場所がある。例えば、春の沢筋や海岸の雪解けが早い草付きの斜面、夏のオオブキが生い茂った沢沿いやアリの巣が集中しているような場所、秋のクマの好物の木の実がたくさん実る場所やサケ・マスが産卵している川、等々。このような場所ではクマに出会う可能性が高くなる。ヒグマの1年の生活の有様を学んでおけば、無用な出会いを避けることができる。

3) 足跡や糞など、ヒグマの痕跡に注意！ 周囲に気配りを怠りなく。

- * 新しい足跡や糞、餌を食べた跡などの痕跡があれば、近くにヒグマがいる可能性がある。そのような場所からは、早めに立ち去ることが得策といえる。ここでもヒグマの痕跡とはどんなものか、あらかじめ学んでおく必要があることは言うまでもない。

4) ヒグマを誘引しない！、危険なクマを作らない！

- * 不必要にヒグマを引き寄せしてしまう可能性がある行為は避けるべきだ。例えば、ヒグマの生息地の中で焼肉などやれば、広範囲に強力にクマを誘引することになってしまう。また、クマに対する訓練を受けていない犬を放したまま連れて歩くと、匂いに敏感な犬はクマに気付いて不必要に吠えかかることがあり、せっかく人を避けようとしていたクマを怒らせてしまう可能性がある。詳細は後述。
- * 何気ないゴミ捨て。それが危険なクマをわざわざ創り出すことになる。人の食物に味をしめたクマは、人を回避しなくなり、むしろ、しつこく人や人家の近くに寄ってくるようになって、人との危険な遭遇の可能性を高めてしまう。もちろん、クマへの餌やりなどもってのほか！！

ちょっとレベルアップ

登山道などで鈴をつけている人は多い。しかし、これはかなりうるさい。クマに関しては安全かもしれないが、気持ちの良い登山道や遊歩道でラジオの音がこだましてくるのは興ざめが甚だしい。あまり大音響の鈴は考え物である。知床自然センター管理事務所のクマ対策スタッフは鈴を携帯しない。なぜならば、まず、うるさい。そして、自分の意志に無関係に常時鳴り続けるので、クマが近くにいるとその気配や動きを感じることができないからである。我々は、見通しが悪いところや曲がり角に来た時、あるいは、真新しい痕跡があったり匂いがして近くにいなさうな時に、手を叩いたり「ホイッ、ホイッ」と声を出したりしており、それで十分である。ただ、これも「ホイッ、ホイッ」言っている時に急に人に会うと、なかなかばつが悪いものである。

ただし、これは必要かつ適切な時に声を出す判断ができない人にはお勧めできない。そのような場合は、常時鳴る鈴の方が良いであろう。また、山菜取りなどクマ以外のことに意識が集中しがちな時には、鈴の方が得策かもしれない。

2) 川沿いは要注意!

- * 水音が騒々しい川沿いでは、物音が聞こえづらい。このような場所では、特に注意を要する。
- * さらに、川は蛇行して見通しの悪い曲がり角が多く、夏にはクマの好物のオオブキが密生している場合も多い。水音が騒々しく見通しの悪いところでは、大声を張り上げたり、大きな金属音のするものを叩いてから、通過した方がよい。腰に下げた鈴程度では役に立たない。
- * 釣り人は特に注意!!。釣り人は往々にして釣りに熱中して、川面ばかりを見て歩いたり、周囲への警戒を怠りがちである。特別に注意を要する。

3) 風を見よ!

背中に追い風、安全サイン

- * ヒグマの嗅覚は聴覚よりもさらに鋭いと言われている。ヒグマが最も頼りにしているセンサーは「鼻」と言っても過言ではなからう。出会った相手が何者かわからない場合に、ヒグマがしばしば見せる行動として、後ろ足で立ち上がり、周囲を見回しながら鼻をヒクヒクさせる場合がある。これはまさに匂いで相手をかき取るようとしているものである。立ち上がる行動は、そのまま即、攻撃行動ではないので冷静に!
- * 匂いは、クマに人間の接近を予告するために重要な要素となる。自分の進行方向から風が吹いていたなら、もし前方にクマがいてもそのクマは人の接近を感じることができない。向かい風に向かって進む時には、匂いはあてにできないため、特に注意して積極的に物音をたてて知らせなければならぬ。逆に、背中側に風を受けて進んでいる時には、クマに気付いてもらいやすい。かといって、物音をたてる注意がおろそかになってはならない。

4) 強風は要警戒!

- * 強い風が吹いている時は、木々のざわめきで音を感じることができなくなる。さらに、あまりにも強い風や頻繁に風向きが変わる嵐のような時、風の変わりやすい地形にいる時、クマは匂いで人を感じることができなくなる。
- * そんな時には、クマの嗅覚をあてにすることはできない。特に大きな声や音をたてて警戒しながら歩かなければならない。むろんそんな強い風の時には、木の枝が折れて飛んでくる危険などもあるので、出歩かないことの方が得策と言える。

5) 眼力は人間の方が一枚上手!

- * 耳も鼻もきかない状態の時、例えば、風が逆風で騒々しい波音が聞こえているような時、クマは至近距離に来るまで人の接近に気付くことができない。わずか30~40mも離れるとなかなか気付いてくれない場合もある(人が動いていれば別だが・・・)。クマの視力はあてにできないと考えておいた方がよい。そんな時には、クマよりもはるか遠方から、人間の方が目で見て気付くことが

できる。クマの側に気付いてもらうばかりでなく、人間の方も動物界では数少ない立体視可能なすぐれた視力をもって、常に周囲に注意を払う必要がある。

- * 野外では、風や音の状態がしばしばクマの嗅覚や聴覚にとって不利な状況があり得る。また、その状況は刻々と変化する。クマの嗅覚・聴覚に頼ってばかりはいられないのだ。従って、人間側にとって視界の悪い状態の時に歩き回することは、遭遇の機会を増してしまう。
- * 登山でしばしば見られる夜明け前の出発や夜間の無理な行動は、遭難対策上ばかりでなくやめた方がよい。もちろん霧で視界がきかないような時の行動も慎むべきである。クマは比較的人通りの多い登山道や遊歩道を日中は避けていても、人が少ない夜間・早朝・薄暮時には近くに来ていることがある。

6) 自転車は速すぎる!

- * マウンテンバイクばかりの昨今、山道や中には登山道や遊歩道まで自転車で走る人がいる。自転車は比較的静かに、しかも、クマが通常予想するスピードよりもはるかに早く移動している。見通しの悪い曲がり角などで、クマが前もって気付くことができずに出くわしたり、あるいは、何者かの接近に気付いていても、逃げようかどうしようかと迷っているうちに、クマにとって予想外に速く至近距離まで来てしまったり、ということがあり得る。
- * 知床国立公園では、しばしば舗装道路でさえ呑気なヒグマがこのこ歩いている。自転車の人もヒグマとの遭遇に注意しながら走らなければならない。北米の国立公園では、サイクリスト専用のクマに関する安全対策用のパンフレットが配布されているほどである。
- * 万一、ヒグマに出会ったらすぐに自転車を止め、クマを興奮させたり追跡行動を誘発しないように、ゆっくり自転車を押して歩きながら後退しなければならない。特にキャンプ用の食物などが積んである自転車を放置して逃げてはならない。ヒグマに人為的な食物の味を覚えさせては危険である。ましてや、人に出会う → 人は驚いて逃げる → 残された自転車には食べ物がある、という連想を学習をさせてはならないのである。

7) 健康志向派人間よ

山の中でまでジョギングするな!

- * 知床国立公園内でも早朝や夕方に、ジョギングをしている人を最近見かけるようになった。しかし、その時、道の先の曲がり角で足音に気付いた母グマが、仔グマを逃がそうかどうしようかと思案しているかもしれない。あなたの足が予想以上に速く、その角に着くまでに母グマは決断できないかもしれないと、ちょっと想像してみるとよい。運悪くそうであったら、あなたは最悪の悪夢を見ることになる(仔に危険が迫ったと判断した母グマが、時に如何に危険な存在になるかは後述)。

ジョギング中の事故の例・・・参考までに

1995年7月、アラスカ州アンカレッジ郊外のトレッキングコースでジョギングしていた人がいた。運の悪いことにそのコースの脇でたまたまヘラジカを倒して食べていたアラスカヒグマがいた。そこに走って行ったその人は、ヒグマに襲われて死亡した。

この事件の原因は、まず、大型の餌を確保して、それを守ろうとしているヒグマが如何に攻撃的な存在となるかということを示している（この件の詳細は後述）。次に、予想外に速いスピードで近づいてきた人間に対して、ヒグマ側も驚いて過剰反応をしたことも絡んでいると分析されている。

注意！ヒグマがいるのはこんなところ！

1) 春の餌場とその回避

* 春の山菜取りに適した場所は、ヒグマの餌場

春の雪解けが早く草本の生長が早い沢筋や海岸の草付きの斜面は絶好の山菜取りポイントである。そんな場所は春のヒグマの重要な餌場でもあることをお忘れなく！

良い場所を見つけたら、焦る心をおさえて、まずは右見て左見て声をかけて、クマがいないことを確かめてから取り始めよう。

残雪の上や雪解け後のぬかるんだ場所には、ヒグマの足跡が残りやすい。下図のような足跡があったら、そこはヒグマも餌場をしているところなので、早々に立ち去った方がよい。

特徴としては指が5本あり、後足は扁平で縦長。裸足の人間の足跡にどことなく似ている。前足の掌は横長で、保存状態が良ければ後ろに「指根球」という丸い肉球の跡が残る。前足の幅14cm以上はオスの成獣で、それ未満はメスか若いオスであることがわかっている。



* 美しいミズバショウの群落は要注意！

ヒグマは大好き。

春から初夏にかけてミズバショウの多い湿地はクマの餌場になる。ミズバショウの葉や地下茎は大好きな食物の一つ。きれいなミズバショウに見とれているとクマに出会う。同じような環境にはえるザゼンソウも好物なので要注意。

* エゾシカの越冬場所は危険がいっぱい

冬から春の残雪期には、エゾシカは冬越ししやすい場所に集まっている。そんな場所には、冬の寒さや雪で死

んだエゾシカの死体があったり、弱ってふらふらになったシカがいることが多い。エゾシカが急増した道東では、それをねらって冬眠明けのヒグマたちが、シカの越冬場所を積極的に利用している。

シカの死体のような大きな餌は、一度に食べきれないため、ヒグマは何日もそこに留まって食べ続ける。近く者があれば、攻撃的になって自分の餌を守ろうとする。知らずに近づきでもしたら、たいへんなことになる（シカの死体に関する危険性は後述）。

春先、エゾシカがたくさん見られるような場所に入るときは、十分に警戒しなければならぬ。

* 海獣の死体に気を付けて！

春、流氷が去った後、道東や道北の海岸には、アザラシやトドなどの死体が打ち上げられていることがある。海獣類が腐敗すると独特のひどい匂いを放つ。ヒグマたちにとってこれはたまらなくいい匂いであり、何キロも先から引きつけられてやってくる。近くに人家などがあれば、速やかに撤去しなければ、もし人が近づいた場合、シカの死体と同じ危険性がある。

付近に人家や交通量の多い道路があり、山林からある程度離れていて、日頃はヒグマが出てくることなど考えられないような場所でも、海獣の死体があればヒグマはやってくる。この匂いには、人間に対する警戒心を忘れさせてしまうほどの、極めて強力な誘引力がある。

死体がそこに見えなくても、海獣の腐敗臭が漂い、何かを引きずって行ったような跡が浜辺にあれば、すぐ背後の藪の中でヒグマが饗宴のまっ最中かもしれない。クジラのような大きな海獣の場合は引きずっていけないので、近くに隠れて夜間など人目に付きづらい時に出てきて食べ続ける。大型の動物が肉を食べた跡がクジラについていれば、今そこにクマがいなくても、すぐ近くに潜んでいる可能性が大であり、警戒しなければならない。

* 春から初夏はヒグマの繁殖期

5～6月はヒグマが繁殖するシーズンである。オスグマは目の色を変えてメスグマを追い回していることがあり、周囲に対して不注意になっていることが良くある。メスもオスに追い回されて逃げることに精一杯で注意散漫になっていることがある。突然の遭遇が起こりやすくなるので、より積極的に人の存在を知らせてやる努力をする必要がある。あなたの目を、後ろばかり振り向きながらメスグマが走り抜け、そのすぐ後を巨大なオスグマが足音も重々しく走ってくるのが起こりうる。「メスグマの後にオスグマあり！」

春、冬眠明けのヒグマは空腹？、危険？？

4ヶ月以上もおよぶ冬眠からさめて出てきたヒグマはさぞ空腹であろう。腹をすかせた春先のヒグマは一段と危険なのではないか？としばしば問われる。しかし、調査や対策活動で、早春からヒグマと至近距離でやり合うことの多い我々の経験からしても、特にそのような素振りを見せるヒグマを見たことはない。また、過去の各地の記録からも、冬眠明けに腹をすかせたヒグマが事故を起こしたと断定できるようなものは存在しない。

春のヒグマが、他の季節に比べて危険ということはないと言える。

2) 夏の餌場とその回避

* オオブキが密生した川にはクマがいる

道内の河川では、川沿いにオオブキと呼ばれる大型のフキが密生しているところが多い。オオブキは夏のヒグマが最も好む食物の一つであり、そのような場所はヒグマが餌場にしている可能性が高い。

ヒグマはオオブキの葉柄(茎)の部分を食べるが、完全にかみ切らずに葉と根元の間に何本かの繊維を残して食べることが多いので特徴的な食べ跡になる。オオブキが食い散らかされた跡があったら、葉の部分をつまみ上げてみよう。茎の部分が食べられて一部なくなり、葉の側に残った茎と根元側の茎が繊維でつながっていたら、まちがいなくヒグマが食べた跡である。

ヒグマは沢筋に沿ってオオブキの密生地を渡り歩きながら、多いときには1カ所で数百本ものオオブキを食べる。食べられたオオブキの茎の切り口や葉が、まだみずみずしいようなら、近くにいる可能性がある。早々に立ち去った方がよい。



ヒグマがオオブキを食べた跡の典型的な状態

* セリ科草本が多い草原も要注意

セリ科の草本はオオブキとともにヒグマが夏に最も好む食物であり、これがたくさんはえている草原を餌場としている場合がある。ヒグマはこれらの茎や葉を食べ、地下茎の部分も掘りかえて食べる。セリ科の草本は、茎のてっぺんに小さな白い花が密集して咲いているのが特徴。これらが多く生えているのは、樹林帯をこえた高山の斜面やカール状の地形、沢筋の雪崩付き斜面の草原、海岸段丘上やその斜面などである。

このような場所ではあちこちに大きく地面を掘りかえた跡がみられる場合もあり、時には広範囲にまるで畑を耕したようになっていいることもある。

セリ科草本を食べた糞は黒っぽく、新しければ表面に

照かりがある。草を食べたり地面を掘った跡があり、しかも、太くて黒い糞が落ちているようなら、ヒグマの餌場にまちがいない。

* アリがうようよ、要注意。

盛夏の頃となれば、アリの巣は最も大きく発達する。そのころヒグマは夏の貴重なタンパク源としてさかんにアリを食べる。枯れ葉などを小さな丘状に積み上げたアリ塚が崩されていたり、石や朽ち木がひっくり返されて、その下のアリの巣がむき出しになっていることがある。大きな石や太い朽ち木をひっくり返すような動物はクマ人間だけであるが、山の中でそんな物好きなことをする人はいない。

巣を荒らされたアリたちは、大慌てで地表に出た卵や幼虫を地下に運び込み、30分ほどで巣を修復してしまうので、もし、荒らされた巣の表面に無数の働きアリが大騒ぎして、卵や幼虫も散乱しているようなら、それは極めて新しい。近くにまだヒグマがいる！

* 排根線は気を付けよう！

ヒグマの夏の餌の3種の神器、オオブキ・セリ科草本・アリの巣がいずれも豊富にあるのが、畑を造成する際に出てきた抜根を土手状に積み上げた「排根線」である。しかも、丈の高い草や灌木に覆われて身を隠しやすいので、ヒグマたちはしばしば餌場としている。

農地や開拓跡地で、排根線沿いに歩くような時は、その藪の中から驚いたヒグマが飛び出してくるかもしれないということを想定しなければならない。

* 夏の木の実も大好物

秋を待たずに夏から熟すエゾヤマザクラやヤマグワはヒグマにとって、夏の貴重なごちそう。ヒグマが頻繁に通ってきているかもしれない。

離農跡地の廃屋の跡などにしばしばあるスモモの木も夏から実が熟す。豊作の年には、地面に落ちて発酵した実の甘酸っぱい匂いが、付近一帯にたちこめていることもある。そんな時、果実酒にでも漬けようかと思いついたら、まずは近づく前に大声でも上げて、クマさんにお知らせしないと、木の下ではち合わせすることになる。

* ワラビ取りは子ジカに注意

6~7月はエゾシカの出産シーズンである。子ジカは生後1週間位まで外敵が近づいてもまったく動かずにじっと草の中に隠れて、敵をやり過ごそうとする。人間でも手づかみにして捕まえることができるほどだ。

この時期、エゾシカが産出している場所では、このたやすく捕まえらるるごちそうにあずかろうとするヒグマが、鶺鴒の目鷹の目でうろろうしていることがある。

ちょうど同じ時期、同じような環境は、ワラビ取りの絶好の場所となる。下を向いてワラビばかりに集中していると、子ジカ探しに熱中して歩き回るヒグマと接近遭遇するかも？

3) 秋の餌場とその回避

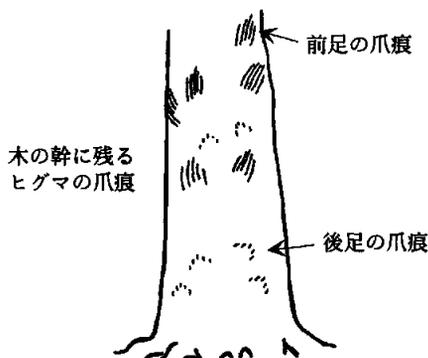
* 上も向いて歩こう！秋の山

秋、迫り来る冬を前に、冬眠に必要な脂肪を蓄えるため、ヒグマたちは山の実りを堪能する。この時期、最も重要な食べ物がドングリ（ミズナラの実）だ。ドングリがたわわに実った森は、まさにヒグマたちの食卓。豊作の森には、何日間も留まってドングリを食べ続ける。

また、人間にも人気の高いサルナシ（コクワ）やヤマブドウはヒグマも大好物。たくさん実っている所には、ヒグマも来ると考えておいた方がよい。

木の実の豊富な森を歩くときは、地上ばかりに注意を払っていてもダメである。しばしば、ヒグマは木に登って木の实を食べるのに熱中していることがある。そんな時、知らずに木の下を通ると、驚いたヒグマがほうほうの体で木から滑り落ちてくるのが実際にある。秋の山は上方要注意である。

ヒグマが木の实を食べに来ている森には、登ったときの爪痕が木の幹に残っているので、注意すればすぐにわかる。また、木の上で枝を折っては実を食べるために、「クマ棚」または「円座」と呼ばれる折れた枝が樹上で寄せ集められたようなものを見ることができる。木々の葉が緑色のうちには折られた枝の葉だけが茶色く枯れており、また、晩秋に他の葉が落葉した後には、折られた枝の枯れ葉だけ落ちずに残っているので、離れた場所からも容易に判別できる。



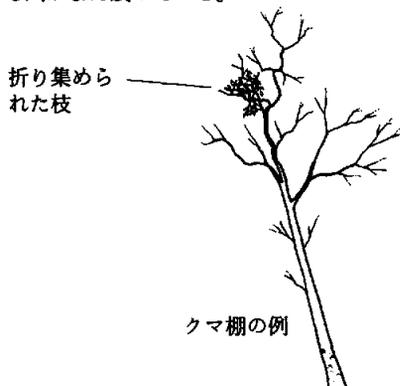
* キノコ取り、夢中になるのは程々に！

秋の山の楽しみはキノコ取り。中でもマイタケ取りは多くの人々を夢中にさせる。マイタケがはえるような立派なミズナラがある森は、ドングリなどの木の实が豊富な森であり、秋にはヒグマたちが頻りに利用しているはずである。往々にしてキノコ取りの時は、地面の方ばかりに気が向いて、注意散漫になりがちなので要注意！

* 遡るサケ・マスは海からの贈り物

秋のヒグマたちにとって、川に遡って産卵するサケ・

マスは、海からの最高の贈り物である。多くの川では人工ふ化事業のために、人間たちが河口で魚を取り上げてしまっているが、知床にはサケ・マスが自然に産卵している川がまだ残っている。



そんな場所はヒグマたちにとってすばらしい餌場となる。サケ・マスが産卵する8月末から11月にかけて、産卵場所には何頭ものヒグマが入れ替わり立ち替わり現れたり、あるいは同時に現れて夢中になって魚を食べる。

サケ・マスが産卵している川では、たくさんの足跡や食べ残した魚が川岸に残っている。

そのような場所では、十分に警戒しながら歩く必要がある。特に川沿いは音が聞こえづらいため、至近距離で出会う確率が高い。ヒグマの痕跡がたくさん残っていれば、たとえ姿は見えなくても、すぐ近くの川岸や斜面の森の中で休んでいることが多い。

* 高山の実り

秋の高山の紅葉は、ひときわ鮮やかな色合いを見せる。そんな時期の登山の楽しみの一つが、コケモモ・クロウズゴ・クロマメノキ等々の甘い木の实であろう。これらがたわわに実っているような場所は、同時に、ヒグマたちの饗宴の場でもある。下を向いて甘い実をほおぼることばかりに夢中になっていると、同じことをしながら近づいてくる毛むくじゃらの同業者に気付くのが遅れる場合があり得る。



自ら危険をまねくべからず！

1) 仔グマの後に、母グマあり！

- * 仔グマに決して近づいてはならない。仔グマにちょっかいを出す行為は、母グマを引きつけるところの話ではすまない。黒い弾丸のごとく、あなたに突進してくる母グマを目にすることは避けた方が身のためである。
- * 仔グマしか見えなくても、親がいないと思ったらおおまちがい。必ず近くにいる。母グマが子に危険が迫ったと感じたら、死にものぐるいで向かってくる。体重100キログラムを超える筋肉質のおばさんと戦いたいと思いませんか？？。
- * 仔グマたちは、危険を感じたらすぐ木に登るように教育されている。樹上にかわいい仔グマを見つけても、「あら！かわいい」と近づくなからず。木の下の藪の中には、全身を緊張させた母グマが潜んでいるのはまちがいない。

2) ゴミ捨ては、あなたも、後からそこに来る人も危険に陥れる。

- * ほとんどのヒグマは人や人家などを避けて行動する。しかし、そんなヒグマも一旦ゴミなどの人為的な餌に餌付くと、急速に行動パターンを変える。人や人家にすこく接近して、餌を再び手に入れようとする。その執着は尋常なものではなく、まったく別の個体になったかのように思えるほどである。
- * 人身事故を起こすクマの多くが、ゴミなどに餌付いたものである。何気ないゴミの投げ捨てが、危険なヒグマをわざわざ餌出す行為となることを肝に銘じなければならない。
- * 例えば、キャンプをしてその付近に生ゴミなどを捨てると、ヒグマを引き寄せることとなり、自分たち自身を危険な状態にしてしまう。滞在中にたまたまヒグマが来なくても、後でやってきたヒグマが餌付く可能性がある。その後、同じ場所でキャンプをする人たちがいれば、ヒグマは再びおいしい餌が手に入ると思って寄ってくるだろう。何気ないゴミ捨てが、後からやってくる別の人たちを危険に陥れることになりかねない。
- * 知床国立公園では、道路沿いを呑気に歩いているヒグマがしばしば見られる。そんなヒグマに車を寄せて、車窓から餌を投げ与える観光客が最近目に付いてきた。これはとんでもない行為である。かつて、観光客によるクマへの餌付けが頻繁に行われた北米のイエローストーン国立公園では、餌付けされたクマによる凄惨な死傷事故を多数経験した。クマへの餌付けは「殺人補助行為」とさえ言えるのだ。
- * 最近、環境に優しい生ゴミ処理方法として普及してきたコンポスト。これも場合によっては考え物である。ヒグマが生息する山林に近い地域では、ヒグマが餌付く可能性があるのも、やめた方が良く、餌付いたクマは「駆除」される運命になるかもしれない。あまり自然には優しい行為とは言えない。また、自分の身の安全にも優しい

とは言えない。

3) 寝た子を起こすな！

やり過ごそうとするクマを怒らせるのは愚かなこと。

- * 山道や沢筋を歩いている時、急に前方の藪の中で大きな動物が動く気配がして、すぐに静かになることがしばしばある。それはあなたの接近に気付いたヒグマがあわてて藪の中に身を隠して、あなたをやり過ごそうとしているのである。ヒグマはすぐ近くであなたが通り過ぎるのを息を潜めて待っているのである。こんな時、何事かと音の方に近づいてはならない。せっかく避けてくれたヒグマの厚意を無にして、双方にとって不幸な結果になりうる。音が静まった地点があなたが通ろうとしている道から50m以上離れていそうだったら、穏やかに声をかけながら、あるいは、手を叩きながら、さっさと通り過ぎる。50m以内でありそうだったら、引き返した方が身のためである。
- * こんな時犬を連れていると、匂いに敏感な犬はクマに気付いて吠えかかってしまう場合がある。せっかく藪に潜んで人をやり過ごそうとしてくれているクマを不必要に怒らせてしまいかねない。犬を放して連れて歩いていたら、ヒグマにかかっている逆襲され、ひるんだ犬は飼い主の方に向かって逃げ帰り、その後を追って怒り狂ったクマが突進して来るという事態になりかねない。クマに対する訓練を受けていない犬を山林内で連れ歩くと危険な場合がある。

4) エゾシカの死体に不用意に近づくなかれ！

- * ヒグマが餌付いたエゾシカの死体は一触即発の爆弾と同じ

春先は、越冬に失敗して死んだシカや弱ったシカをクマは盛んに食べる時期である。シカなどの一度に食べきれない大きな餌を手に入れたクマは、その場に何日も留まって食べ続ける。そんな時、クマは土や落ち葉を数メートル四方にわたって盛り上げて土饅頭を作り、死体を隠してその上やすぐそばに居座り続ける。人間など近づくと、餌を奪われると感じて、クマは非常に攻撃的に餌を守ろうとする。シカの死体や土饅頭らしきもの、あるいは、直接見えなくとも死体の腐敗臭が感じられたら、決して近づいてはならない。全身の毛を逆立てて、怒りを爆発さ



せたヒグマの姿は見たくないものである。

* 農地のシカの死体の危険性

農地の縁や隣接した山林内に、有害鳥獣駆除や狩猟で死亡したシカの死体があった場合、ヒグマが餌付いている可能性があるので不用意に近づいてはならない。シカによる畑の被害を防ぐために、周囲に漁網などの網を張る例が見られるが、これは危険な状況をまねいてしまうのでやめた方がよい。なぜならば、オスジカが角を絡ませて動けなくなる例が頻繁に見られ、しばしばそのシカをヒグマが餌として利用しようとするからである。網からシカを外したり、網を補修しようとして不用意に近づくと、餌を守るためにヒグマが攻撃してくる場合がある。

また、漁網を張った程度では、シカの被害を防ぐことはもともと困難であり、気休め程度にしかならない。ヒグマに関わるよけいな危険をまねくだけである。

* 道路の維持管理作業をする人のために

北海道東部のシカの密度が高い地域では、しばしば交通事故で死亡したシカの死体が道路沿いで見られる。これらの処理のために近づくとときには、ヒグマが餌付いていないかどうか慎重に見極めなければならない。特に、道路敷地に接した山林内にシカが死んでいる時は要注意である。そのような場所は、見通しが悪くてヒグマがいるかどうかを確認しづらい。また、既に道路上からヒグマが林内に引きずり込んでいるのかもしれない。

シカの交通事故防止のための防鹿フェンスを張る場合には、繊維製素材の網を用いてはならない。その理由は、上記の「農家の場合」と同様である。

* 狩猟や駆除のシカの死体も要注意！

シカの密度もハンターの入り込みも多い道東では、手負いになって死亡したシカの死体や狩猟で捕られた後に放置されたシカの残骸をしばしば目にする可能性がある。これらの死体にヒグマが居着いている場合にはたいへん危険であるので、不用意に近づいてはならない。また、山奥で捕ったシカを解体して、何度かに分けて担ぎ下ろそうとする場合、運搬している間にヒグマが餌付いている場合があり得る。2回目以降に獲物のシカに近づくと場合には、十分注意しなければならない。北米ではこのようなシカの解体運搬の際に、事故に遭うハンターの例がしばしば報告されている。

近年、エゾシカの個体数の増加と駆除や狩猟によるシカの死体の増加にともなって、道東地区のヒグマは積極的にシカを餌として利用するようになってきている。シカの死体にはハンターも十二分に気をつけなければならない。

5) 農家の皆さんへの注意

* 畑作物被害の発生パターン

秋口のビート畑やデントコーン畑、メロン畑、ニンジン畑などには、ヒグマが餌付いてしまうことがある。

被害の多くは、山林に隣接した畑で発生し、平野部の畑では被害発生は希である。しかし、防風林や河畔林などの樹林帯が、回廊のように山から伸びてきているよう

な所では、平野部であっても被害が発生することがある。彼らは樹林帯に身を隠しながら密かに潜入してくる。油断は禁物である。

被害は多くの場合、畑の隅のすぐ林に隣接したところから始まる。ヒグマは夜間や早朝、夕方などに人がいないのを見はからって、こっそり林から出てきて作物を抜き取り、すぐに身を隠せる林内にもどって、そこでゆっくりと食べる。警戒して林縁部から離れようとせず、畑の中で姿を曝してのうのうと食べるようなことはほとんどしない。このような時には林から畑への通路のように草がなぎ倒されてクマ道ができていいる。林に入ると食べかけの作物が散乱し、草が広く踏みしだかされている。ヒグマはここに隠れていて、人目を盗んでは畑の隅から作物を失敬してくるのだ。この段階では広い畑では、ちょっと見渡した程度ではなかなか被害発生に気がつきづらい。

しかし、このように気弱で慎重な食べ方は、時を経るにつれ大きく変わってくるのが通例だ。だんだん大胆に畑の中央まで食べに出てくるようになり、そのうち畑の真ん中にのうのうと座り込んで食べ始める。それがはじめは夜間などの時間帯に限られていても、そのうち日中堂々とやり始める。

このような畑への出沒パターンから言えることは、メロンやスイートコーン、デントコーンのようなヒグマの嗜好性が高い作物は、可能な限り山林の林縁部から離れた農地に作ることで、被害を受ける可能性を軽減できるということである。

* 畑に作業に入る時の注意点

生ゴミなどに味をしめているような特殊なクマでない限り、むやみに人に寄ってくることはないので、大きな音をたてて、人が来たことを知らせてから畑に入るようにすれば、クマは離れて行く。デントコーン畑のように背丈の高い作物が茂って見通しが悪い場合には、特に注意しなければならない。もし、クマを良く追う犬を飼っていたら、農地に入る前にまず安全な場所から犬を放してしばらく様子を見て、物音をたてながら入るようにすればよい。

畑の周囲の排根線や林内に休んでいることもあるので、畑の縁の草刈などをするときは注意しなければならない。

* 電気牧柵は精神的なバリアー

畑への被害や侵入は、電気牧柵を張り、漏電などないようにきちんとメンテナンスすれば防ぐことが可能である。電気牧柵は物理的に侵入を防ぐ柵ではない。常に強力な電気ショックを与えることによって、「精神的なバリアー」を形成する。従って、草刈を怠って漏電していることがあったり、クマが来なくなったからといって電源を切っていたりということがあると、バリアーが崩れてしまう。電気ショックがある時もあれば、無い時もある、というようなことでは甘く見られ、強行突破されたり、電線の下を掘って侵入されたりということになる。電気牧柵で最も重要なことは、「きちんとしたメンテナンス」である。それさえ怠らなければ、効果的なバリアーが形成され、怖がって柵に近づくことさえなくなる。

「電気柵が効かない」という例のほとんどは、メンテナンスを怠けているからにすぎない。

* 農業廃棄物を捨てるべからず

メロンやスイカなど特にヒグマを誘引する作物は、商品にならない廃棄作物を畑に野積みしておくとしヒグマが餌付く危険性が高い。

家畜の後産や斃死獣などを付近に廃棄するのは絶対にやめるべきである。埋めても無駄である。2～3m程度の深さでは、すぐに匂いで見つけだして食べてしまう。これらはシカや海獣の死体と同様に強力にヒグマを誘引してしまう。放置すれば行動はエスカレートして行き、結果的に生きた家畜さえ襲うようになった例が過去にも多く記録されている。もちろん人身事故にもつながりかねない。

6) 漁業者への注意

* 漁業廃棄物はクマを呼ぶ

定置網漁では、しばしばアザラシやトド、イルカ類が羅網して死亡する。これらの死体を人家や番屋近くの浜に放置しているとヒグマが餌付く危険性が高い。また、漁業施設の近くに海獣類の死体が打ち上げられた時には、放置せずに速やかに撤去すべきである。手間はかかっても、ヒグマが餌付いた後の厄介さを考えれば、すぐに処理すべきだ。

また、雑魚などを付近の浜に投棄すると、海獣の死体と同様の危険性が生じる。その他、生活上の生ゴミも同様である。

* 魚干すならクマ注意!

ヒグマが生息する山林に隣接した漁業施設で干し魚を作る際には、干す場所を高床式にしてヒグマが登れないようにしたり、電気柵で囲わなければ、ヒグマに食われてしまう可能性がある。一度味をしめると、非常にしつこくねらってくるようになり、エスカレートした場合には、番屋など漁業施設内に侵入することさえある。

* 空き缶ポイ捨ての結末は、番屋の大被害

番屋などを長期的に留守にする際には、嚴重に戸締まりを行い、食品は食用油など調味料類も含めてすべて撤去しなければならない。最近の番屋におけるヒグマの被害では、まったく外部に匂いが漏れない缶ジュースまで被害にあっている。1箱まるまるすべての缶ジュースが飲み干され、空き缶が散乱している番屋もあった。密閉された缶の中に甘い液体が入っていることをなぜクマは

知ったのだろうか? 缶の表面に印刷された「オレンジジュース」という文字が理解できたというようなことは考えづらい。おそらく、往々にして番屋での作業中に投げ捨てられるジュースの空き缶の中に残った甘い匂いに誘われ、缶を噛ってみて学習したのであろう。何気ない空き缶のポイ捨てが、危険なクマを創り出す。

近年の知床半島先端部周辺の番屋における被害発生状況を見ると、食料やゴミの管理を厳格に行っている番屋では、周囲にヒグマが数多くいてもまったく被害が発生していない。一方、ゴミの管理などにルーズな番屋は、軒並み大きな被害を受けるという、明確なコントラストが見られた。

7) その他、狩猟中の事故を回避するために

* コール猟に関する注意

ディアークールによってエゾシカをおびき寄せて撃つ猟が盛んになりつつある。最近の道東地区のヒグマはエゾシカを獲物として積極的に利用するようになっているため、コールでおびき寄せられるのはオスジカばかりでなく、クマも引き寄せてしまうかもしれないということ念頭において猟を行わなければならない。

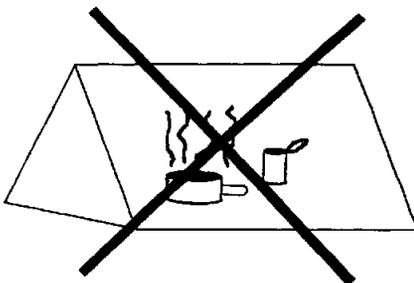
8) キャンプの際の注意

* テント内の食料保管や調理は世界の非常識!

日本では常識的に行われているテント内の食料保管や調理、食事をやめることが大前提である。北米ではクマの生息地でこのようなことを行うのは、自殺行為といわれても仕方がない。食料をクマに取られないように保管方法を工夫するとともに、食料保管場所、調理と食事の場所、および、就寝場所をそれぞれ100m近く離して、三角形に配置することが重要。また、クマに食料やゴミを奪われないように工夫しなければならない。例えば高く木につるすなどの方法が、北米では広く行われている。

* 天場選びは慎重に!

天場選びも、クマの通り道や餌場にならない場所を選ぶ配慮が重要。沢登りでよくやる川岸のフキ群落の中での幕営は、通り道かつ餌場への幕営であり、これはやめた方がよい。また、ヒグマの餌が多い高山草原やカールは、快適なテントサイトではあるが、これらも絶好のヒグマの餌場である。もし私なら、そのような場所にはテントを張らない。快適性より命の方が大切なので・・・。



また、古いゴミが散らかっている場所での幕営も避け方が良い。以前捨てられたゴミに味をしめたヒグマが近くにいる可能性があるからだ。

また、登山の場合、クマの生息地では食料のデポ（事前の荷揚げ・残置）を絶対やってはならない。ヒグマを餌付けすることになってしまう。

しかし、上記のような配慮を知っている人はまだ稀であるのが現状である。我が国の登山者の多くは、人がいれば、あるいは、テントが張ってあれば、クマは寄ってこないと考えているが、そのような常識はもはや通用しない。本州の北アルプスや大雪山、知床でも、テントがあるうが人がいようが気にせずに行動するクマが増えている。

人を気にしないことが、そのまま即危険とはいえないが、そこでいい匂いがプンプンしていたり、あるいは、食糧やゴミが外に放置されたりしていれば、積極的に近づいてきて餌として手に入れようとする場合がおこりうる。人為的な食物の味を覚えてしまったクマは、極めて危険な存在になる。人の近くに行けばおいしい餌が手にはいることを学習してしまい、人を威嚇し排除したり攻撃して食物を無理やり手に入れようとするようになる場合があるからである。そのような例は、北米で多数報告されている。キャンプ地や登山道にゴミを捨てたり、あるいは、食糧やゴミの管理がずさんなキャンプをすることは、その時自分たちはたまたま大丈夫であったとしても、危険なクマを創り出すことによって、後からそこに来る人々を危険に陥れる行為となることを肝に銘ずるべきである。最近おこった大雪山におけるヒグマのテント襲撃事件などを考えると今後同様の事件が発生しうる。

*** 食料コンテナや食料保管庫を活用しよう！**

テント泊の際には、就寝時にゴミや食糧をテント内に置かないことが鉄則であるが、適切な保管場所がない場合も多い。例えば、登山の際には尾根沿いの縦走路には高木がなく、食糧を高くつるす工夫をすることもできない場合がある。

そのような場合、強化プラスチック製の携帯用クマ対策コンテナ（商品名：Bear Resistant Container）に、食料・ゴミなどクマを誘引する可能性のあるものをすべてをビニール袋で密閉して入れ、テント・調理場所そ

れぞれから十分離れたところに置いておくのが最も安全である。

このコンテナは円筒形の容器になっており、アタックザックの中に入れてたり、あるいは、専用の袋に入れてザックの外に取り付けて運搬する。太い円筒形の形は、クマに押しつぶされたり、あるいは、かみ砕かれなれないために工夫された形態である。また、蓋は突起が最小限に押さえられており、クマの爪がかからないようになっている。

このコンテナの強度は、クマの力に耐えられることが実証済みであり、アラスカの国立公園ではバックパッカーには携帯が義務づけられているところさえあり、日本のツキノワグマやヒグマにも十二分に通用する。クマスプレーの輸入元のアウトバックで購入可能。

問い合わせ先：P.12参照

知床連山縦走路のキャンプ地では、日本で唯一、金属製のクマ対策食料保管庫が環境省によって整備されている。泊まるときには、食料・ゴミなどクマを誘引する可能性のあるものすべてをビニール袋で密閉してこの保管庫に入れて就寝すると良い。立ち去るときには、必ず入れたものを持ち帰ること。入れたものを放置したり、ゴミ箱がわりに使ってはならない。

知床連山縦走路のクマ対策保管庫の設置場所：

三つ峰 野営指定地（98年設置）

二つ池 野営指定地（99年設置）

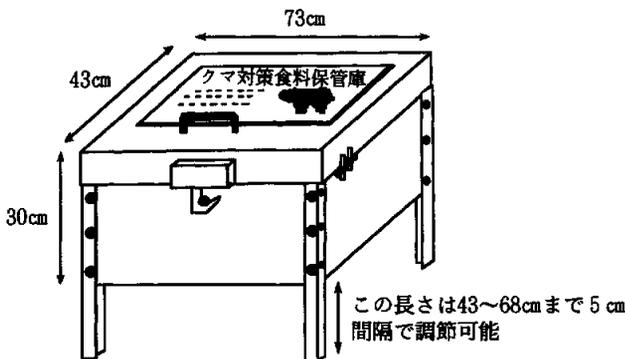
硫黄山第一火口野営指定地（2000年設置）

羅臼平 野営指定地（2002年設置予定）

それでも、ヒグマに出会ってしまったら!?

ヒグマとの遭遇のさまざまな状況における対応の方法について以下に記す。しかし、これはあくまでクマに出会ってしまったからの対応手法である。一旦遭遇してしまえば、その時々状況や突発的な不可抗力によって、予想外のことがおこりうる。以下は想定されるさまざまな状況下において、事故を回避できる可能性のより高い手法を述べたものである。このマニュアルどおりに行動すれば完全に安全が保証されるという性質のものではない。

最優先すべきは、クマに遭遇することを避けること、ク



- クマ対策食料保管庫**
- * ステンレス製
 - * 分解組立式（ボルト留め）
 - * 重量67kg
 - * アンカーで脚を直接岩盤に固定
 - * あるいは、セメント製の土台に脚を埋め込んで固定

マを誘引してしまわないことだということをここで改めて強調したい。知床国立公園は世界的にも最も高密度にクマが生息する地域の一つであるが、そのような環境にあってさえ、クマを回避するさまざまな対応をとれば、ほとんど完全に出会わずに行動することが実際に可能である。出会わないための注意を怠らないことが何よりも重要である。それを忘れてはならない。遭遇してもこのマニュアルに示された行動をすれば大丈夫と考えて、不注意な行動をとることがあってはならない。

本マニュアルの前半の「ヒグマと出会わないための注意、引き寄せないための注意」を理解し正しく行動していれば、以下に記されているような状況は、めったに生じないはずである。

以下は山中のこれまで25年間にわたる経験、および、カナダ アルバート大学スティープン・ヘレロ教授が30年間にわたって北米でのクマによる事故例を分析した結果をまとめた良書「ベア・アタックス」、また、同教授ら数人の北米におけるクマのスペシャリストたちがまとめたクマ安全対策ビデオ「Staying in Bear Country」の内容を参考にしたものである。

[状況その1] 距離が離れていた場合。

- 1) 100～数百m離れて相手が気付いていない。
 - * 気付かれないうちに、静かにその場を立ち去る。
- 2) 100～数百m離れているが、気付いており、こっちに注目している。あるいは気付いていても無視している場合。
 - * 静かにその場を立ち去る。走るな！常にクマの動きを監視しながら。新たな動きがあればすぐに次の対応に移れるように！
 - (注：「ベア・アタックス」に記述されている「稀な例」のような、数百メートルも距離が離れているにもかかわらず突進してきた例は、経験したこともないし聞いたこともない。日米のヒグマの攻撃性の違いか??)
- 3) 100～数百m離れているが気付いており、こちらにゆっくりと近づいてくる場合
 - * あなたを人と認識せずに接近してきている可能性があ



ゆっくり歩いたときのヒグマの足跡
前足と後足の足跡が重なるか、前足の足跡が後足のすぐ前につく。

る。石や倒木の上など目立つところに上がって、大きく腕をふりながら、穏やかに声をかけ、人がいることを教えてやる。ほとんどの場合、気付くとあわてて逃げて行く、あるいはゆっくりとコースを変えて立ち去っていく。

- * 知床における多数の例の中では、このような時に更に近づいてきたことは皆無。従って、以下に述べることは希な例。
- * 上記の行動をとっても接近をやめない時。興味本位（特に若い個体）や、極めて稀ながら、もしかしたら捕食行動で接近してきている可能性も考えるべき。車内や屋内に待避。あるいは、高く登れる木やクマが登りづらそうで自分が登はん可能な崖などないか、周囲を探しながらゆっくり待避。
(注：しかし、北海道のヒグマは少なくとも大型のものは木登りが得意である。どうしようもない時には相手より高い位置に立つことの利点はあるが・・・)
- * ここでも走ってはならない。単なる興味本位で近づいてきている場合、興奮させて激しい追跡行動などを誘発しては困る
(注：犬と同じく、走り逃げるものを本能的に追う場合があるので・・・)
- * このような状況の時、持ち物を投げ捨ててクマがそれに興味を持っていじっている間に距離を稼ぐ、あるいは逃げるということを推奨している例もある。確かに利点はあるが、これには以下の問題もあることを認識しておくべき。
その1：特に食料が入ったザックなどを捨てた場合、これを手に入れて食物の味をしめたクマは、人間を脅しつけると餌が入手できるということを学習し、危険な行動をエスカレートさせる可能性がある。その時、自分は助かって、後からその場所に来る人を危険に陥れる可能性がある。
その2：後で防衛姿勢（後述）をとる必要性が発生した場合に、自分の身を守る貴重なプロテクターとなるザックを失ってしまうこと。
従って、少なくとも食物が入ったものは決して投げ

「ベア・アタックス」は2000年9月に日本語版が出版された。
S. ヘレロ著 上下2巻、各2,400円
出版社：北海道大学図書刊行会
TEL：011-747-2308
お近くの書店でも注文できる。

捨ててはならないし、ザックは背負ったままの方がよい。その他の物であれば、投げて時間をかせぐ試みとしてやってみる価値はある。

*そして、さらに距離が50m前後以下になり、明らかに人を意識しながら接近を続ける場合。待避できる場所がなく、逃げ切れそうになれば、強気に対応すべき。岩の上や倒木の上などに立ち、自分をできるだけ大きく見せて、強い調子の声や大きな物音をたてることのできる物で威嚇する。複数の人がいれば、必ずまとまって行動する。決してバラバラになってはならない。棒でも何でも戦う武器を用意できれば手に取る。クマスプレーがあれば発射可能な体制に準備。数メートル以下になれば、持ち合わせのもので抵抗することを決断すべき。4m以内になって更に近づいて来るようであれば、クマスプレーを持っていたら、全量を一気に鼻と目に当たるように噴射。

(注：このような事態になる前に、風向を考慮して相手から風下にならないように、ゆっくりと位置関係を変えておかないと、スプレーが効きずら

く、ましてや自分にかかる可能性がある)。

*繰り返すが、上記のような例はきわめて希である。しかし、このようなこともあり得るということを認識しておかなければならない。

[状況その2] 突発的な遭遇。距離が20m以上 50m以下。

ヒグマとの遭遇で最も多いのが、不注意による「突発的な遭遇」である。このような事態になること自体失敗であり、本マニュアルの前半部分を十分に理解して実行していれば、ほとんど回避できることを再度強調しておく。

姿は見えなくとも、遭遇のしばらく前から自分の周囲につきまとっている気配がしていたり、つけられている気配があったら、[状況その1]の3)(p.11)の対応を想定しておくべき。

1)のっそりと立ち上がる。あるいはひょっこり出てきた場合。

*後ろ足で立ち上がって(あるいは四つ足のまま)鼻を

クマスプレー

(COUNTER ASSAULT)

北米でクマを追い払うために開発された。トウガラシの辛み成分である「カプサイシン」を濃縮した液体が噴出され、クマを追い払うことができる。射程は4~5mなので、離れたところにいるクマに用いても意味はない。本当に襲われそうな時だけ、最終手段として用いる。至近距離で発射し、クマの目や鼻に確実に吹きかけなければならない。

北米でのヘレロ教授の調査結果によると、クマスプレーはクマの攻撃的な行動を90%以上の確率で停止させることができるとされている。我々も知床において既に何度も使用しており、効果的にヒグマを追い払うことができている。このスプレーはヒグマから直接攻撃を受けた際に高い確率でヒグマを追い払い、事故を避けることができる携帯用の道具としては、現在考えられる限り最も優れたものである。

しかし、あくまで100%ではない。

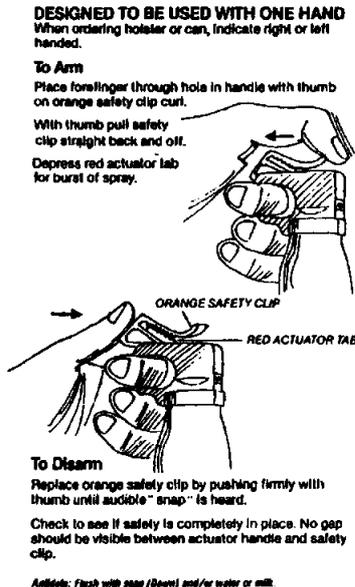
クマスプレーを使わざるを得ないような状況を招かないように注意することが最も重要である。クマスプレーを持っているために安心して注意を怠るならば、かえって危険である。

テントの周辺やゴミ捨て場などで、クマを寄せないためにあらかじめ付近に吹きかけておくのは逆効果なので要注意。刺激臭に興味を持って、かえって近づいてくる。

近くの登山用品店やアウトドアショップに在庫がない場合は、輸入元のアウトバックに問い合わせると良い。

問い合わせ先：(有)アウトバック TEL: 019-696-4647, FAX: 019-696-4678

E-Mail: outback@cup.com URL: <http://outback.cup.com/>



Bushwacker Backpack
&
Supply Co., Inc.

distributors of

**COUNTER ASSAULT
REPELLENT**

ヒクヒクさせ、周囲を見回していたら、何者かが近くにいるのは分かるが、それが何か判断できておらず、嗅覚や視覚で確認しようとしている。

- * ゆっくり両腕をあげて振り、穏やかに話しかける。すぐそばに障害物（立木など）があれば、クマとの間にそれを置く位置関係に静かに移動（注：万一の突進に備えて）。クマスプレーを持っていたら発射準備しながら移動する。
 - * 私の経験では、上記の対応でほとんどすべての場合、クマは気付くと走って逃げるか、あるいは、ゆっくり立ち去った。
- 2) 上記の対応を行って、気付いてもこちらを無視している場合。
- * ゆっくり両腕をあげて振り、穏やかに話しかけながら、かつ、クマから目を離さず（ただし睨みつけないこと）、クマ側の行動を監視しつつ、ゆっくりと後退。その場から立ち去る。
- 3) 上記の対応を行ってもクマが立ち去らず、興奮気味になってきたら・・・
- * さらに、ゆっくり両腕を上げて振り、穏やかに話しかける。すぐそばに障害物（立木など）があれば、クマとの間にそれを置く位置関係に静かに移動（注：万一の突進に備えて）。石の上や倒木の上などに立ち、自分をできるだけ大きく見せる。
 - * 立ち去ってくれない理由がないか？、付近を冷静に観察。子グマがいないか（上方にも注意、木に子グマが登っていないか）？、シカの死体などを防衛しようとしていないか？
 - * この場合、多くは低く唸ったり、カブカブと顎を打ち鳴らしたり、興奮して激しく地面を叩いたりすることもある。このような行動は、人との出会いにクマが強いストレスを感じていることを意味する。葛藤の中で、逃げ出すべきか、あるいは、身を守るために攻撃に打って出るかと迷っている。ここで大声を出したりして強く威嚇し、興奮させてはならない。興味本位や捕食行動で近づいてくる希な例に対する対応とは逆であるので十分に注意のこと。
 - * ゆっくり両腕をあげて振り、穏やかに話しかけながら、かつ、クマ側の行動を監視しつつ、ゆっくりと後退。その場から立ち去ること。子がいったり、シカなどの死体が見えたり、あるいは見えなくとも腐敗臭がして死体がありそうな場合は、すみやかに、しかし、ゆっくりと（難しい注文だが・・・）、つまりは急な動きで

相手を更に興奮させないように後退すること。いつまでもそこに動かずにいると、敵対行動と受け取られる可能性大。

- 4) まずい！ 突進がはじまった！
- あるいは、のっそりと立ち上がる、あるいはひょっこり出てきたとたんに、突進行動になった場合。
- * まだ落ちついて！！
 - * 多くの場合、威嚇突進行動（ブラフチャージ）である。だーっと突進して立ち止まり、激しく地面を叩いたり、そしてすぐに後退することが多い。また、これを数回繰り返すこともある。穏やかに声をかけつつ、相手の動きを見ながらゆっくり後退する。
 - * さらに、ゆっくり両腕を上げて振り、声をかけつつける。相手が何者か分からないまま、とりあえず威嚇行動にはしている可能性がある。すぐそばに障害物（立木など）があれば、クマとの間にそれを置く位置関係に静かに移動。石の上や倒木の上などに立ち、自分をできるだけ大きく見せる。クマスプレーがあれば発射準備。
 - * 走るな！騒ぐな！ 残念ながら、ブラフチャージの突進と、本物の攻撃へ至る突進は、突進開始時点では識別不能。しかし、多くはブラフチャージなので、ここで大騒ぎして走り出したりすれば、威嚇が本物の攻撃行動に転化する可能性がある。
- 5) 更に残念ながら、本物の攻撃であった場合
- * 突進が止まらず、もはや3～4 m（クマスプレー射程距離内）に迫ったら、クマスプレーがあれば、全量を鼻と目にあたるように一気に噴射。
 - * スプレーがない場合、あるいはスプレーが効かず攻撃を受けてしまったら、その場に倒れ込んで防御姿勢をとる。両足を抱え込むように体を丸め、首を胸の方に曲げて腹部を守る。両手は首の後ろに強く組んで急所の首を守る。リュックサックを背負っていたら、背中を守るプロテクターとなる。攻撃が収まるまで動かない（注：これはかなり難しいことではあるが・・・）。
 - * 突発遭遇時の攻撃は、クマは自分や仔グマを守ろうとする「防衛的な攻撃」である。このような場合、短時間で立ち去るはず。ここで積極的に抵抗すると、クマは興奮して更に激しい攻撃を続け、重大な傷を負う可能性のほうが高いことがわかっている（ベア・アタックス：ヘレロ教授の分析結果）。

間違えな！「防御姿勢」と死んだふりとは違う！！

直接攻撃を受けていない時、防御姿勢を取ってはならない。かえって興味を持って近寄ってくる場合がある。

1995年8月、アラスカのデナリ国立公園を歩いていたあるバックパッカーが、数十メートル先にヒグマ（グリズリー）を発見した。危ないと思った彼は、地面に身を投げて死んだふりをした。クマの方はかえってびっくりして、何事かと興味を持って近寄ってきて、彼を引きずり回し、背中中のザックを奪い取っていった。幸い軽傷ですんだが、至近距離まで突進を受けたり、直接攻撃を受けてもいないのに、このようなことをすると逆に危険である。

[状況その3] 突発的な遭遇。距離が20m以下。

1) クマもびっくりして立ち上がるか、四つ足のまま驚愕の表情

- * ゆっくり両腕をあげて振り、穏やかに話しかける。すぐそばに障害物（立木など）があれば、可能ならクマとの間にそれを置く位置関係に静かに移動（注：万一の突進に備えて）。クマスプレーがあれば準備しながら・・・と言いたいが、多くの場合、そんな余裕はない。ほとんどの場合、唖然として立ちすくむと、とたんに、クマも全速力で逃げていくのが普通。
- * とにかく、突発的に走って逃げるとか、大声でわめくような行動は、ただでさえびっくりしているクマを更に怯えさせ、ストレスのあまり防衛的な攻撃に移らせる可能性がある。唖然として立ちすくんでいるのが、一番良いかも知れない。
- * 我々は、このような至近距離の遭遇を避けるべく、音を出してクマに知らせながら歩くことなど、さまざまな注意を常に怠らないようにしているので、このようなことはめったにない。このことが大事！。至近距離で会ったらどうするかを考える前に、そうならないように注意することが最重要。互いに精神的余裕のない状況で会えると、予測不能の事態になりがちである。知床国立公園ほどのヒグマの超高密度地域であってさえ、出会わないための注意事項を慎重に守れば、ほとんど出会わずにすむことを改めて明記しておく。

2) 出会ったとたんに、唸り声をあげたり地面を叩くなどの威嚇行動あるいは突進行動に移った場合

- * [状況その2] の4) (p.13) 以下の対応へ

[状況その4] テントサイト（主に夜）にクマが接近。

下記のような状況は、これまで我々にも経験がなく、「ベア・アタックス」や「Staying in Bear Country」ビデオを参考にするしかない。著者のヘレロ教授も言うとおり、このような状況で接近するクマは、かつて人為的食糧を得た経験があってテントを襲うと食糧が入手できることを学習していたり、あるいは、もしかすると人を餌と認識している可能性さえ考慮しなければならない。

1) テントサイトに接近してきたり、あるいは、天場周辺に入って来たのに気付いたら

- * 近くに車や家屋などがあれば、すみやかに待避。
- * 鍋釜などを打ち鳴らし、大声で威嚇して追い払う。強気の対応を！
- * クマスプレーがあればすぐに発射準備。
- * 何でも良いから武器になりそうなものを探して用意する。
- * 逃げ場がなければ、積極的に抵抗。
- * 複数の人がいれば、必ずまとまって行動、あるいは、抵抗。バラバラに逃げるべからず。

2) 気付いたときには、既にテントにのしかかったり、噛み破ろうとしていたとき

- * 鍋釜などを打ち鳴らし、大声で威嚇して追い払う。強気の対応を！
- * クマスプレーがあればすぐに発射準備。
- * 武器になりそうなものを探して用意し、積極的に抵抗。
- * 複数の人がいれば、必ずまとまって行動、あるいは、抵抗。

このようなとき、クマスプレーの有無は生死を分けるかも知れない。テント泊の際には必ず持参し、寝るときにはすぐに手に取れる枕元に置きたいものである。

[補足]

狩猟中にヒグマに遭遇したら！

クマ獵のつもりでなかったあなたはどうするべきか？

狩猟経験が長いハンターでも、クマに対する対応を正しくできる人は少数派である。もし、自信をもって撃ち倒すことができるという状況でなければ、軽々しく発砲すべきではない。これが大前提である。その方が、下手に発砲するよりは自分自身にとってはるかに安全であるし、狩猟者の責務として手負いグマを作ってしまうことは万が一にも避けなければならないからである。

狩猟で山歩きをしているときにヒグマが近くにたまたま現れたり、シカの巻き狩りでたまたま追われてしまったクマが、待ち役や勢子役のハンターの近くに走り込んでしまったりすることがあり得る。そのような場合は、特にクマを撃つつもりでなければ、そのまま何もせずにやり過ごすのが最も安全と言える。発砲して怒らせたり、あるいは負傷させるとかえって危険な状況になりうる。

そのような場合、すぐ近くで立ち上って周囲を見回したり、匂いをかき取ろうとすることがしばしばある。立ち上がる行動は攻撃行動ではない。多くのハンターはこれを勘違いしている。これは相手を確認しようとする行動である。本気で攻撃してくる際には、四つ足のまま突進してくる。



走った時のヒグマの足跡
前足の足跡のはるか前方に
後足の足跡がつく。

立ち上がったクマに恐れをなして発砲してはならない。静かに声をかけたり、手を振るなどの行動で人間がいることを教えてやり、ゆっくりと後退すればよい。また、近距離での遭遇にクマが驚いて、ブラフチャージ（見せかけの威嚇突進）をしてくる場合がある。ここでもむやみに発砲するのは逆効果である。真の攻撃であった場合に備えて、しっかり銃の狙いを付けながら、見極める必要がある。多くの場合、突進を途中でやめて引き返したり、走り

去っていく。

ただし、繰り返しブラフチャージを行う場合は、仔グマを守ろうとしていたり、あるいは、シカの死体などの餌を守ろうとして、威嚇している場合があり得る。そのような場合は、留まっていると敵対行動としてとらえられる可能性があるため、クマの動きに注意しながら、ゆっくりと後退して早々にその場を離れた方がよい。走ってはならない。追跡行動を誘発する。

知床のヒグマの生態と対策の実情に関する参考図書 しれとこライブラリー3 「知床の哺乳類Ⅱ」

知床の原生自然に生きるヒグマの生き様と人間との関わり、年間400～600件にもおよぶヒグマに出没に対応して危機管理を行う知床自然センターのスタッフの活動を紹介。北海道全体の人とヒグマの共存対策についても記述。

2001年4月 北海道新聞社 発行 知床博物館 編 1,890円

お近くの書店にない場合には・・・

問い合わせ先： 北海道新聞出版営業部

〒060-8751 札幌市中央区大通西3丁目

TEL：011-210-5744 FAX：011-232-1630

